

「高度な知の創成と的確な知の継承」一。岡山大学の理念のもとに教育・研究を展開する個性あふれる教員たち。研究室を訪ねる。

NAKAMURA Eizo (59歳)

- ▶1955年 佐賀県東松浦郡玄海町生まれ
- ▶1986年 University of Toronto, Ph.D.
- ▶1986年 フランス・パリ第6、第7大学地球物理学研究所 研究員
- ▶1987年 岡山大学地球内部研究センター 助手
- ▶1995年 岡山大学固体地球研究センター 教授
- ▶2003年 岡山大学固体地球研究センター センター長
- ▶2014年 岡山大学地球物質科学研究センター センター長



地球物質科学研究センター長

中村栄三

あふれる遊び心

エアシャワーを抜けると、青や黄色のカラフルな壁、扉が目の前に現れた。地球物質科学研究センター内のクリーンルーム。スタッフらで「模様替え」した室内は、無機質な「研究施設」のイメージとは異なる。

最先端の分析機器には、イス、サル、キジのイラストがついたネームプレートが貼ってある。機器の一部に、岡山らしい愛称をつけており、論文でも「INU」「SARU」などと紹介している。

「研究は楽しいもの。とにかく何でも楽しみたい」と中村センター長。小惑星探査機「はやぶさ」が持ち帰った小惑星「イトカワ」の微粒子から発見した多数の小さなクレーター（直径100〜200ナノメートル）には、形が大手ドーナツチェーンの人気商品に似ていたことから「ボンデリングクレーター」と名付けた。



◀鳥取県の三朝地区にある地球物質科学研究センター

マントルから宇宙まで 最先端の分析技術で謎を解明

世界トップレベルの物質分析技術を“武器”に、地球や宇宙の謎を解明し続ける岡山大学地球物質科学研究センター。そのトップを務める中村栄三センター長は、国際的にも高い評価を受けるさまざまな成果を挙げてきた。宇宙同様、大きな志を持ちながら、日々、研究にまい進している。



◀中村センター長の研究成果が掲載されたJAXAのパンフレット

幅広い研究対象

研究成果は多岐にわたる。同センターの多様な分析機器を駆使して、鳥取県の大山（標高1729メートル）の「誕生」経緯を解き明かしたり、ロシアに落下した隕石の太陽系での変遷を突き止めるなどしてきた。

「面白いと感じたら、何でも取り組む」と話すように、研究対象は地下数100キロメートルのマントルから宇宙まで幅広い。今年4月には宇宙航空研究開発機構（JAXA）宇宙科学研究所の客員教授に就任。イトカワの微粒子や本年度中の打ち上げを目指す「はやぶさ2」が持ち帰るであろう小惑星試料の分析態勢を指導する。



地学への目覚め

「正直言うと、勉強は全くしていなかった」と、自身の中学・高校時代を振り返る。幼少期は山や川や海、自然の中で過ごすことが好きだった。地学の勉強を本格的に始めたのは、大学受験の時。「一番薄い教科書だったから」とその理由を明かす。

大学入学後はマグマに興味を持ち、研究に没頭することにな

る。「幼いころ遊んでいた場所は、マグマによって形成された地形。そのことは何となく知っていたが、物質科学的に掘り下げたいと思うようになった」。自身も知らぬ間に、身近な古里の自然が、将来歩むべき道をともしてくれたのかもしれない。

技術の伝承

学生に世界をリードする物質科学研究を肌で感じてもらうようと、「国際インターンシッププログラム」を毎年実施。例年、世界中から70〜80人の応募があり、約10人を受け入れている。「研究者は自己完結で終わってはいけない。得た知識や経験を次の世代につないでいくことで、学問は発展する」と言うように、技術（Digital）の伝承を大切にしている。「自分たちにしかできないユニークな学問を追究して成果を挙げる。そうすれば、ここで学びたいという人が集まり、果立った人間はここを誇りに思うだろう」。

宇宙は急激に膨張するインフレーションによって始まり無限に広がっている。

「田舎の小さなセンターだが、インフレーションを起こすような、発信の起点でありたい」。そう考えている。